

## 時代の眼

# 留学生たちの社会保障研究

副 田 義 也

私は、筑波大学に勤務して17年目になるが、この数年、大学院で私が担当するゼミナールの学生たちの過半数は、外国人である。かれらは韓国人、中国人、台湾出身の中国人などが主であるが、ほかに、スリランカ人もおり、かつてアメリカ人、バングラディッシュ人などもいたことがある。かれらは、それぞれの文化的背景が多様であり、またそれぞれに個性的な若者であるが、総じていえば、その多くが優秀で、学習意欲が高く、礼儀正しい若者たちである。とくに韓国人、中国人の留学生の場合、感性的ないかたをすると、私は、かれらが日本の高度成長期初期に青年としての私のまわりにいた同世代の友人たちと似ているように思う。若者の生きかたがもつひたむきさや熱気のようなものは、経済の成長段階によって規定されるところがあるということか。

さて、その私のゼミナールにいる留学生たちはさまざまな研究テーマを選んでいるが、かれらのうちには日本の社会保障や福祉国家体制をテーマにして博士論文を書いたり、その準備をしている者がいる。かれらにとっては、日本の社会保障や福祉国家体制に関する文献がまさに、「海外社会保障情報」である。本誌の読者であるあなたにとっては、海外社会保障情報とは、日本以外の外国の社会保障に関する情報である。それは、あなたにとってあたりまえのこと、なんの不思議もないことである。しかし、そのような発想の持ち主は、日本の社会保障に関する情報が海外社会保障情報であり、もっとも主要な規範国の社会保障情報である、アジア諸国からの留学生がいるということ、不断はあまり考えないのではないか。これは、そのような留学生たちの話である。

4つの話題を提供する。

第1の話題は文献についてである。一般に留学生たちは、日本にやってきて出会う研究上の恵まれた条件として、文献が豊富であることをあげる。母国では研究に必要な文献を入手することに大きい制約があるというのだ。私自身、中国にゆき日本の社会事象を研究している若い研究者に会って、50冊にたりないその蔵書の少なさに痛ましさを感じたことがある。大学や研究所の図書館も少数の例外をのぞけば日本関係の蔵書が量質ともに充実していない。だから留学生たちが目を輝かせて、日本にくると本が沢山あるから素晴らしいというのはよくわかる。

---

この事情は日本の社会保障を専攻する留学生の場合も基本的には同一である。しかし、そのうえで、かれらを指導しながら、かれらが読む日本の社会保障に関する文献の質について思うことがある。

1つは、多くの文献が欧米産の理論やイデオロギーによって日本の社会保障の歴史や現状を論じているということである。この事実はそれなりの必然性がある生じているのであり、その是非をにわかにはいいたてても仕方がないことは承知している。しかし、この事実に関するかぎり、社会保障の理論を研究するためには、日本に留学するよりも、欧米に留学する方が効率的であるということになる。これでは日本への留学は次善の策である。礼儀正しいアジアからの留学生はそれをいわない。しかし、私はそう思う。そして、日本の社会保障や福祉国家体制を素材として研究し、そこからつくられた日本産の理論やイデオロギーがあればよい。アジアからの留学生は日本にきてそれを学ぶ。かれが母国に帰って、そこで社会保障制度を形成したり、研究するさいに、その日本産の理論やイデオロギーが、欧米産のものより役に立つという事態があればよいのにと夢想するのである。

いま1つ、沢山刊行されている日本の社会保障に関する文献は、質的にみると、はなはだしいばらつきがある。率直に言えば、優良品は少ない。留学生は最初のうちそれがわからず、どの書物にも強い関心を示す。かれらによい書物の見分けかたを教え、限られた時間と費用をつまらぬ書物で無駄づかいしないように指導するのは大事な仕事である。しかし、これはくわしく書いて同業者の少なからぬ人びとのうらみを買うべきではあるまい。

第2の話題は競争についてである。一般に研究者の世界は業績競争の世界である。これは大学院でも変わらない。そこで、留学生は日本の社会事象を研究するさいには、決定的にさえみえる不利な条件のもとで、日本人の学生と競争しなければならない。日本人の仲間はその社会事象の研究のみに専念すればよいのに、留学生はその前提として日本語の学習に多くのエネルギーと長い時間をさかなければならないのである。

留学生が日本の社会保障を研究するさいには、日本人の学生に比較して不利なのは日本語の学習の負担だけではない。日本の社会保障を理解しようとするれば、日本の政治や経済、企業や地域、家族や教育、ひろくは日本文化の全般について一定程度の知識が必要である。日本人の学生は、それまでの成長過程でそれらの知識のかなりの部分を常識として身につけている。その知識を留学生は一から学ばねばならないのである。

---

私のところにきている留学生の多くは実によく勉強をする。かれらの日本語と日本社会を学ぶ努力をみていると、心から感心させられる。私自身が外国語を学ぶのには必要最小限の努力しかしたことがなく、外国に出かけるのは億劫でしかたがないほうなので、かれらの努力をみると、自分にはできないことだと思って、ただただ偉いものだと思うのである。それなのに、かつての同僚のなかには、留学生に対して、日本人の学生に対するのと同じように、英語を読み書きする能力を要求するひとがいた。留学生のなかには語学の天才としかいいようがない女性がいる。彼女はその要求に応じることができた。しかし、多くの留学生にとって、日本語も英語もという要求は酷である。そうやって私が留学生をかばうと、その同僚は平然としていった。「しかし、君、社会学は元来、欧米の学問だからね、社会学をやるのなら英語はできないと困る。」いったい、このひとは、アジアの留学生が日本に社会学を学びにきてくれることの意味をどう考えているのだろうか。それならば、留学生は欧米にゆけばよいではないか。

第3の話題は誘惑あるいは逃避についてである。留学生は一方では日本語と日本社会について大急ぎで勉強をしながら、他方では専門のテーマに選んだ日本の社会事象の研究に打ちこみ、辛い業績競争をつづける。そのうちに、かれを1つの誘惑がおそう。それは、かれが専攻する日本の社会事象と同一の、あるいは類縁性が高い母国の社会事象をテーマにして論文を書くという誘惑である。たとえば、日本の社会保障を研究している留学生ならば、母国の社会保障の萌芽的形態やその社会的代替物、あるいは貧困や疾病などの社会問題について論文を書くのである。それは業績競争で得点をあげやすい。

その理由はあらためて書くまでもなかろうが、まず、母国でのさまざまなコネクションを利用することで、論文の材料やデータが集めやすい。また、テーマとする社会事象の経済的、政治的、文化的背景もよくわかっている。しかも、そうやって書かれた論文は、そのテーマの目新しさによって、日本人研究者から強い関心をよせられ、高い評価があたえられることが多い。指導教官も面白いとってくれるし、学会でもよい評判がえられる。このこと自体は悪いことではない。

しかし、この道に深入りすると、留学生はいつのまにか日本の社会保障を研究するという当初の志を忘れてしまうことになる。留学期間が終わったときには、かれは、母国の社会保障の萌芽形態などに関する紹介論文を沢山書き、博士論文もその線でまとめている。日本にきて、母国の問題の専門家になって帰国するという訳である。これは、社会保障研究だけでなく、社会科学の多くの研究分野で、アジア諸国から日本にきた留学生たち、さらにはアメリカにいった留学生たちのあいだ

---

でも、広くみられる現象のようである。

第4の話題は進路についてである。留学生は学位を得て帰国し、大学にポストを求める。韓国の場合、ポストが少なく就職難は深刻であるが、就職に成功すれば、大学教員の経済的待遇はかなりよく、社会的地位も高い。その報酬の実態をきくと、日本の薄給の国立大学教員としては、うらやましくてため息が出るほどである。

深刻なのは中国の場合である。大学教員の経済的待遇、社会的地位はともに低く、社会全体の中の下というところだという。最近、一時帰国していた中国人留学生が日本にもどってきて挨拶にきいていうところでは、かつてのかれのクラスメイトで大学の教員になっていた者はすべて、この2年間で銀行員やそのほかの職種に転職したという。

中国は市場経済を導入して大きな社会変動を経験しつつあり、社会保障制度の形成が急がれている。ぼくは日本の社会保障制度を研究して、帰国したら大学教員となり、社会保障について講義をし、政策提言もして国のために働きたい。かれは旧友たちに会って、かれの希望をそう語った。友人たちは皆びっくりして口々にいったそうである。

「お前は資本主義国に留学しながら、資本主義をさっぱり学んでいないらしい。資本主義とは金もうけのことだ。金もうけが大切なのだ。大学の教員などになったら、収入は乏しい。妻や子どもに対しても責任がはたせないじゃないか。家族がかわいそうだ。」

これも聞いていて、ため息が出た。

(そえだ・よしや 筑波大学教授)